

第2 【事業の状況】

1 【事業等のリスク】

当第1四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。

なお、重要事象等は存在していません。

2 【経営上の重要な契約等】

フィールズ株式会社（提出会社）

相手方の名称	契約品目	契約内容	契約時期
株式会社大一商会	パチンコ遊技機	当社からのコンテンツ使用許諾に基づく遊技機の企画、開発、販売等に関する業務提携契約 (当該遊技機を当社が独占的に販売する内容を含む)	平成27年6月1日から平成32年5月31日まで以後3年毎の自動更新

3 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において当社グループが判断したものです。

(1) 業績の状況

当第1四半期連結累計期間（4月－6月、以下「当第1四半期」）の概況

売上高は17,140百万円（前年同期比129.8%増）、営業損失1,005百万円（前年同期の営業損失2,509百万円）、経常損失864百万円（同経常損失2,254百万円）、親会社株主に帰属する四半期純損失867百万円（同親会社株主に帰属する四半期純損失1,502百万円）となり、通期見通しに対して概ね計画通りの進捗となりました。

業績の主な要因は、下記のとおりです。

遊技機販売においては、昨年9月のパチスロ機の型式試験方法変更に適合した「エヴァンゲリオン・希望の槍」などを販売しましたが、ユーザーからは一定の支持を受けている状況にあります。当社は、引き続き、業界内での規則変更等の流れを市場拡大のビジネスチャンスと捉え、ゲーム性、エンタテインメント性の高い遊技機を販売する計画のもと、各種営業施策を推進しています。

当第1四半期においては、下表のとおり営業活動に努め、計上台数はパチスロ28千台（前年同期比23千台増）、パチンコ15千台（同22千台減）、総販売台数44千台（同0.2千台増）となりました。

なお、その他の事業においても、概ね計画通りの進捗となりました。

<販売済み及び営業活動中のタイトル（平成27年7月31日現在）>

パチスロ遊技機	納品月
エヴァンゲリオン・希望の槍	平成27年6月
パチスロ バイオハザード6	平成27年7月

パチンコ遊技機	納品月
CRエヴァンゲリオン9 零号機暴走ループVer.	平成27年5月
CRミリオンゴッドライジング	平成27年7月
CR機動戦艦ナデシコ（※）	平成27年8月
CR魁!!男塾（※）	平成27年8月
CRエヴァンゲリオンX（※）	平成27年9月

（注）「※」印は、平成27年7月31日現在、営業活動中のタイトルです。

主なIPの創出・事業化の取り組みは、下記のとおりです。

当社グループは、中長期を見据えた成長戦略として、キャラクターやストーリーをはじめとするIP（知的財産）をクロスメディアで展開する循環型ビジネスを推進しています。

IPの創出については、コミック誌『月刊ヒーローズ』を中心に、引き続きIP開発に注力しました。また、同誌掲載作品のクロスメディア展開に向け、複数の映像化プロジェクトを進行させるとともに、ゲームやパチンコ・パチスロ化の企画開発を推進しました。

映像を起点とした展開については、テレビ分野において『ウルトラマンX』の放送を開始し、WEB配信分野において『ニンジャスレイヤー フロムアニメイシヨン』の映像配信を行いました。また、テレビやWEB配信を通じた映像展開に併せ、各々のキャラクターを活用した子供向け、大人向けの商品展開を実施しました。

IPの収益化を担うマーチャンダイジングについては、多様な分野において収益基盤の強化に努めました。ソーシャルゲーム分野においては、前期に投入した『アニマル×モンスター』の大型アップデートや新たなコラボレーション企画など、ゲーム性のさらなる改善を進めました。この他、既存キャラクターの商品展開に加え、コンセプトや世界観を形にする『A MAN of ULTRA』（ライセンスブランド）を立ち上げました。ライブエンタテインメント分野においては、『ウルトラマンシリーズ』を活用した体感型のライブエンタテインメント・ショーを、国内はもとより海外でも公演しました。パチンコ・パチスロ分野においては、当第2四半期に導入する『パチスロ バイオハザード6』や『CRエヴァンゲリオンX』など、IPを活用した複数の遊技機の営業活動を進めました。なお、当社グループは、当第1四半期に遊技機メーカーの株式会社アリストクラートテクノロジーズ、及び株式会社スパイキーを子会社化しており、今後は、両社が保有するハードウェアやソフトウェアなどの資産を活用した商品展開にも着手していきます。

（注）本文に記載の商品名は各社の商標または登録商標です。

(2) 財政状態の分析

(資産)

流動資産は、50,657百万円と前連結会計年度末比20,357百万円の減少となりました。これは主に売上債権の減少によるものです。

有形固定資産は、12,253百万円と前連結会計年度末比56百万円の増加となりました。

無形固定資産は、4,447百万円と前連結会計年度末比43百万円の減少となりました。

投資その他の資産は、22,724百万円と前連結会計年度末比109百万円の増加となりました。これは主に長期貸付金の増加によるものです。

以上の結果、資産の部は90,082百万円と前連結会計年度末比20,234百万円の減少となりました。

(負債)

流動負債は、26,883百万円と前連結会計年度末比18,890百万円の減少となりました。これは主に仕入債務の減少及び未払法人税等の減少によるものです。

固定負債は、4,893百万円と前連結会計年度末比596百万円の増加となりました。これは主に退職給付に係る負債の増加によるものです。

以上の結果、負債の部は31,776百万円と前連結会計年度末比18,293百万円の減少となりました。

(純資産)

純資産の部は、58,305百万円と前連結会計年度末比1,940百万円の減少となりました。これは主に利益剰余金の減少によるものです。

(3) キャッシュ・フローの状況の分析

当第1四半期連結累計期間における現金及び現金同等物（以下、「資金」という。）は、前連結会計年度末に比べ185百万円増加し、16,009百万円となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果使用した資金は、5,334百万円（前年同期は8,932百万円の支出）となりました。これは主に売上債権の減少24,506百万円、仕入債務の減少26,148百万円、法人税等の支払2,296百万円等によるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果得られた資金は、75百万円（前年同期は544百万円の支出）となりました。これは主に貸付金の回収による収入1,427百万円、貸付けによる支出1,393百万円等によるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果得られた資金は、5,445百万円（前年同期は1,172百万円の支出）となりました。これは主に短期借入れによる収入6,670百万円、配当金の支払1,107百万円等によるものです。

(4) 研究開発活動

該当事項はありません。